

朝鮮古代史研究から東アジア史への展望

李, 成市
早稲田大学文学学術院

<https://doi.org/10.15017/2004827>

出版情報：韓国研究センター年報. 18, pp.19-32, 2018-03-31. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

講演

朝鮮古代史研究から東アジア史への展望

李成市（早稲田大学文学学術院）

はじめに

このたび九州大学韓国研究センターが主催する第2回韓国前近代史若手セミナーの講演を依頼された。若手研究者諸氏の研究に対する問題関心を高めることに寄与できれば幸いである。また、このような機会を設けて下さった企画委員の方々に感謝したい。最初にお断りしておくが、私はこれまで同様の主題で講演を行ったことがあり、多くの部分で重複している点について、ご寛恕願いたい。

ところで、私自身がこれまで研究に従事してきた問題意識については、2016年6月に英国がEUを離脱することが決定した際に求められて書いたエッセイがある。そこで朝鮮古代史研究と東アジア史に対する考え方を率直に述べたことがある。その後、讀賣新聞のデジタル版(International:Opinion:WASEDA ONLINE TheJapan News by the Yomiuri Shimbun)に「Brexitの衝撃から——東アジア史は希望の宝庫たりえるか」(The Brexit Shock—Can We Find Hope in East Asian History?)というタイトルのもと、今年の7、8月に日本語と英語で各々紹介されたので、主題にも関わることでもあり最初に紹介したい。

(1) Brexitの衝撃

6月23日の国民投票でEU離脱票が残留票を上回り、英国は28カ国に拡大したEUから離脱する初めての加盟国となった。このニュースに接した私は、これまでの自分の研究を全否定されたかの

ような衝撃を受けた。

人類の歴史は、各地域の共同体から国民国家に至る過程ではない。それは通過点にすぎず、諸国家は対立や利害を超えて、より大きな政治的、経済的共同体に向かって拡大していく。従来の「歴史」は、19世紀以来の国民国家を到達点と見なすがゆえに、国民国家を過去に投影した歴史像を構築し、それを疑問なく受け取ってきた。しかし近代国家が通過点に過ぎないのならば、これまでの歴史像は新たな現実から書き直されなければならないのではないか。EUの着実な拡大の過程をみながら、そのような確信は強まっていった。ちょうど私の研究が様々な形になりつつあったころでもあり、ベルリンの壁崩壊後の欧州の現実の動きは大いに励ましになった。

(2) 東アジア史研究との出会い

70年代初めに大学に入学すると、私は朝鮮古代史の研究を一生の仕事にしたいと思うようになった。というのも、国内外で新たな研究が次々に世に問われた時期でもあったからだ。韓国や北朝鮮の歴史学界では、戦前に日本人研究者によって強調された他律性史観、停滞史観の克服、さらに朝鮮文化の独自性の解明などが課題となっていた。要するに、植民地史観の克服がめざされており、これまで通説とされていた研究が懐疑にさらされていた。

そのような南北の学界の動向を気にかけてながらも、私には1960年代から日本の歴史学界の潮流となっていた「東アジア」という枠組で歴史を捉え

る方法論に傾倒するようになっていた。植民地主義の克服は必須の課題ではあるが、それが行きすぎると戦前の日本の皇国史観のようにショービニズム(排外主義)に陥るのではないか、一国史の枠組は歴史のダイナミズムを見失うことにならないだろうか¹。そうした疑問を感じながら、東アジアの視点から古代朝鮮の国家形成、国際関係、文化交流に関する論文を70年代の終わり頃から書き始めた。

(3) 東アジア史の中の朝鮮古代史

1998年に学位論文としてまとめた著作は、朝鮮半島の古代を対象とする研究ではあるが、あえて『古代東アジアの民族と国家』というタイトルで刊行した。その前年には、正倉院宝物の伝来ルートを手がかりにした古代の交流史を『東アジアの王権と交易』という書名で上梓していた。その後、発表した単著も『東アジア文化圏の形成』、韓国で刊行した史論集も『創られた古代—近代国民国家の東アジア言説』という書名で、いずれも「東アジア」にこだわった。

一国史に還元できない歴史は、史料からいくらかでも探し出すことが可能なのであるが、一国史というドグマが「みても見えず」という不自由をもたらす。たとえば、30万点以上の出土がある古代日本木簡は「中国、朝鮮と無縁であって、日本列島に独自に生まれ展開した」と1996年当時、ある学会で長老学者が語気強く主張していた。しなしながら、

1 この点を痛感したのは、朝鮮史研究会が1978年に『新朝鮮史入門』を企画し、「前近代の朝鮮文化史」の執筆の依頼を受けたことを契機とする。当時ようやく学術論文を書き始めた頃であり、また日本に「朝鮮文化史」(「過剰な期待」)を受けて困惑した。しかしながら、原稿締め切りまで読んだ論文は著作を含めて300以上であったと記憶する。それらをまとめた冒頭において書かざるを得なかったのは、朝鮮文化史に関する言説の「ショービニズム」についてである。朝鮮史研究会編『新朝鮮史入門』(1981年6月、龍溪書舎)参照。

この10年の間に韓国木簡の出土と、それに基づく日韓比較研究で、そのような独りよがり、あっさり否定されてしまった。韓国木簡研究は私にとって東アジアにおける文明の伝播と受容のダイナミズムを裏づける貴重な体験でもあった。

このような認識に至る過程は、単に新たな資料の発見にあったのではない。隣国の研究者との人的交流が深まる中で、お互いの知見を交換しながら、資料と方法を共有していくという文字どおり共同研究が深化した成果でもあった。

(4) 現実と東アジア史研究

90年末以降、東アジア諸国で生じた教科書問題や歴史認識問題では、国家が主導する共同研究が開催されたが、それらは外交交渉のようなものであって、ナショナリズムを強化することになって学問的には不毛な結果しか生まなかった。その一方で、民間の研究者の交流が深化し、日中韓の近現代史の副教材も作成され刊行された。EUがヨーロッパの歴史を教科書として刊行したように、東アジアでも同様の歴史教育の必要性が説かれるようになっていった。

英国のEU離脱が発表された直後、ある会合で冒頭に記したような痛恨の思いを述べて2週後、英国の歴史家ティモシー・ガートン・アッシュ氏がEU離脱の衝撃を「わが政治人生における最大の敗北」と表現したことを朝日新聞(7月14日東京版)のインタビュー記事で知った。「問題は地理的、歴史的、文化的に帰属するかではなくて、特定の政治目標を共有するかどうか、ということなのです。(欧州と)東アジアとの決定的な違いはそこにある」とアッシュ氏は言う。しかし決して東アジアに希望がないわけではない。アッシュ氏は「最も重要なのはグローバル化で敗者となった人達に希望のメッセージを与えることです」と述べている。私には

「東アジア史」が希望の宝庫になりうるか否かが切実に問われていると受けとめられた。

以上のようにエッセイで述べたが、ここには、私が朝鮮古代史研究から出発しながらも、一國史を克服するために東アジア史を志し、そのような視角から木簡研究に携わるようになったこと、さらに現在、古代史研究に従事しながら、東アジア諸国間の歴史認識問題に深い関心を持っていること、そして、東アジア史を考えることは東アジアの現実に貢献することでもあるという私の考えを簡潔に記した。私の朝鮮古代史研究や、さらには東アジア史は日本の学界や日本を取り巻く国際環境抜きに語るができないと考えたからである。そこで、以下に朝鮮古代史を学び始め、やがて東アジア史研究へと向かった契機について具体的に述べることにする。

1. 私が朝鮮史を学ぼうとした頃

私は1952年に日本の名古屋市で生まれ、義務教育から大学、大学院まで一貫して日本の教育を受けた。高校から大学に進学する70年代の始めには、日本で活躍する朝鮮人作家の金達寿氏が日本列島各地に残っている古代朝鮮文化の痕跡を訪ね歩いたノンフィクション『日本の中の朝鮮文化』(第1巻、1970年、講談社)がベストセラーになり、やはり在日朝鮮人作家の李恢成氏が1972年に『砧を打つ女』で芥川賞を受賞するなど、日本中で日朝関係に対して新たな関心がもたれるようになる時代であった。

もともと中学生や高校生の頃から歴史や考古学に興味を抱いていたが、高校在学中あるいは大学へと進学する頃に、古代日朝関係史においてもセンセーショナルな話題が耳目を引き、関心はいっそう高まっていた。たとえば、朝鮮民主主義人民

共和国(以後、北朝鮮と略す)の代表的な学者である金錫亨氏の著作が翻訳され(『古代朝日関係史』勁草書房、1969年)、古代の日朝関係史は大和朝廷の朝鮮半島支配ではなく、朝鮮半島諸国の日本列島における分国の歴史(植民の歴史)という大胆な仮説が学界を揺るがしていた²。また72年には、古代日本の朝鮮半島支配を裏づける決定的な史料とされてきた広開土王碑文は、「陸軍参謀本部によって改ざんされた」という学説が発表されるや、日本の代表的な新聞は全て第一面でこれを紹介していた。NHKは、碑石の改ざんが可能か否か実験してみせる番組まで作成し、この説の可能性を強調していたことを記憶している³。

ほぼ同じ頃、奈良県明日香村の高松塚から壁画古墳が発見されると、高句麗の壁画古墳との関係が新聞、テレビなどジャーナリズムを賑わせ、渡来人(帰化人)の役割が古代史で注目されるようになった。金達寿氏の『日本の中の朝鮮文化』はますます多くの読者を獲得し、古代の日朝関係史は市民をも巻き込みながら、学界の通説に対する異議申し立てをする動きが顕著になっていった。

このように1970年代の初頭は、古代の朝鮮半島と日本列島との関係が広く社会問題として話題になっていた時代であった⁴。そうした潮流の中で、

2 日本古代史研究に与えた衝撃については、鈴木靖民『古代国家史研究の歩み—邪馬台国から大和政権まで』(新人物往来社、1983年)を参照。

3 広開土王碑文研究の再検討は、日本近代史研究者である中塚明氏による「近代日本史学史における朝鮮問題—とくに「広開土王碑」をめぐって」(『思想』561、1971年(原載)、『近代日本の朝鮮認識』研文出版、1993年)によって着手され、それを受けて李進熙氏が陸軍参謀本部改ざん説を提起した。陸軍参謀本部のスパイ活動が碑文研究に深く関わっていたことは、佐伯有清『研究史広開土王碑』(吉川弘文館、1974年)によって解明された。しかし碑文の「改ざん」(その後「すり替え」と変更)という李進熙の主張(『広開土王碑の研究』吉川弘文館、1972年)は、現在の研究では、日本のみならず、国際的にも全く認められていない。その後の広開土王碑をめぐる研究に、李成市「表象としての広開土王碑文」(『思想』842、1994年)、武田幸男『広開土王碑との対話』(白帝社、2007年)、同『広開土王碑墨本の研究』(吉川弘文館、2009年)、李成市「石刻文書としての広開土王碑文」(『東アジア出土文字資料と情報伝達』汲古書院、2011年5月)などがある。

4 この当時の動向は、1974年の春に刊行された雑誌『東アジアの古代文

社会的に注目を集めている古代の日朝関係史を学問的に検証できるのか、大学で学んでみたいと漠然とはあるが考えるようになっていた。

当初の希望どおり早稲田大学文学部に進学したものの、大学内に朝鮮史研究の専門家は皆無であった。しかし東洋史学科の福井重雅先生は学界で活躍されている宮田節子先生に紹介状を書いて下さり、それをもって朝鮮史研究会の月例会を訪ねた。初めてお会いした宮田先生は、東京大学の武田幸男先生⁵、國學院大学の鈴木靖民先生⁶を紹介して下さいました。お二人は当時すでに日本を代表する朝鮮古代史研究者、日本古代史研究者でいらしたのですが、こうして古代日朝関係史が市民の注目的となっていた70年代の半ばに、両先生の下で学部や大学院の講義、演習を受講しながら、朝鮮古代史の勉強を始めるという幸運に恵まれた。

2. 日本における朝鮮史研究の位置

やや奇異な物言いになるが、朝鮮史は、日本で学ぶ外国史の中でも、かなり特殊な位置を占めている。たとえば、英国史やフランス史を研究しようとするれば、英国やフランスといった「本国」の研究

化』(大和書房)に詳しい。この雑誌の総目録と、その果たした歴史的な役割などについては「座談会『東アジアの古代文化』成果とゆくえ」最終号(2009年、136号)を参照。

- 5 戦後日本を代表する朝鮮史研究者であり、古代史のみならず、高麗史、朝鮮時代史にわたる多くの著作がある。主著は『高句麗史と東アジア』(岩波書店、1989年)。緻密な史料批判の上に構築された実証史学は、われわれ後学が継承すべき研究基盤である。個別実証論文のみならず、『奴隷制の封建制』(旗田巍編『朝鮮史入門』太平出版、1966年)のような研究の手引きから通史、概説、書評に至まで、どの論考からも数多の知的刺激をうける。
- 6 日本列島内の多様な地域間交流をはじめ、朝鮮半島、中国大陸、沿海州、オホーツク沿岸を含めた諸地域との関係を、文献のみならずフィールドワークによって得られた考古学的知見を駆使して古代日本の対外関係史を再構築している。交流史が相互関係であるがゆえに、日本列島との交渉があった当該地域の歴史や言語がわからなければ、対外関係史研究ができないことを、身を以て示されている。主著は『古代対外関係史の研究』(吉川弘文館、1985年)。

者が唱える学説から学ぶことは当然であり、それらの本国の研究から全く離れて日本において研究がなされることは殆どありえない。

改めて言うまでもなく、外国史研究は、まずはその土地に生きている人々が自分たちの過去に関する研究をいったん受けとめ、現地における研究成果を学習することから通常は始まる。外国史を学ぶということは、外国という他者と、その地の過去(その地に居住していても一般の人には知りえない他者)という二重の他者と向き合うことを意味する⁷。このような当然すぎることに思いを致すようになったのは、韓国学界との交流が増し、研究者との対話が繰り返されるようになってからであった。

ところが、日本の中国史研究にもやや似たところがあるが、日本における朝鮮史研究は長い間、本国(韓国や北朝鮮)の研究とは直接関係なく、日本の学界で、ある意味では自己完結的に行われてきたという歴史的経緯がある。そもそも日本の朝鮮史研究は、近代日本が朝鮮の植民地統治あるいは植民地支配の正当化のため、それまでの土地所有関係を明確にする目的から「旧慣調査」が始まり、そうした事業の一環として、歴史、民族、習俗など、様々な調査が20世紀初頭に着手され、それ以来、日本人の手によって近代の学問として研究がなされてきた。植民地支配のための学問であるがゆえに、国家プロジェクトとして膨大な予算と人材が投入されてきた。近代的な意味における「朝鮮史」研究は、改めて言うまでもなく、まずは日本人による日本人のための学問として出発した⁸。

7 私たちは百数十年前までの前近代の歴史を容易に理解できる漠然と考えているが、百年以上前のことが現在の類推で容易に理解できると思うのは錯覚というほかない。外国の文化(異文化)が周知な調査によって初めて理解できるように、自分の社会の過去も、相当の覚悟と準備がなければ理解することはできない。百年以上前の歴史が容易に理解できないという指摘は、安部公房『内なる辺境』(中央公論社)を参照。

8 李成市「コロニアリズムと近代歴史学—植民地統治下の朝鮮史編修と

1945年まで、そのような朝鮮史研究が日本人の手でなされたが、植民地支配が終わった後も、本国における研究とは別個に、既存の研究蓄積の上に、戦後の日本における朝鮮史研究が再開され、国際的にも最も高い水準の成果が生みだされた⁹。しかしながら、それらは韓国や北朝鮮の研究とは殆ど切り離された形で行われてきたところがある¹⁰。そうした意味において、日本の朝鮮史研究は、他の外国史、とりわけ日本におけるヨーロッパの諸国を対象とする歴史研究とはかなり異なる。

ただし、支配のための歴史研究といえば、インド史をはじめ、アジア諸国の歴史は大なり小なり植民地宗主国の研究者によって着手されたという点で共通点があるとも言える。しかしながら、これに加えて、外国史としての朝鮮史の特殊性は、植民地から解放された後に、本国の歴史研究が全く異なる二つの体系を、相互に対抗しながら今日に至るまで作り上げているという点にある。1948年

に朝鮮半島の南に大韓民国が、北に朝鮮民主主義人民共和国が各々国家イデオロギーを異にして成立し、自国を正当化するために各々が依拠するイデオロギーによって現在に至るまでの歴史を各々に叙述してきた¹¹。

とりわけ北朝鮮では、史的唯物論あるいは70年代以降は主体思想に従い、解放後の社会主義国家に至る歴史的過程を、いわば必然の過程として構築している¹²。南北において古代史から近代史に至るまで、相互に共有する歴史が全くないというわけではないが、近代史の認識については隔絶しており、そのような歴史認識の相違は、外国史として日本で朝鮮史を学ぶものをたじろがさずにはおかない。

しかし、最も重要な問題は、二つの本国の歴史研究の体系が異なることもさることながら、20世紀初頭以来、継続して日本人によって担われてきた朝鮮史研究と本国との相違についてである。その違いを生じさせているのは、南北両国の研究が共に、日本人によって構築されてきた朝鮮史研究の克服、つまりは植民地史観の克服という共通の課題を掲げてきたことが、日本の朝鮮史研究との違いを際立たせている¹³。

古蹟調査を中心に」(永田雄三,寺内威太郎,矢島国雄,李成市『植民地主義と歴史学』(刀水書房,2004年)。

9 戦前における日本人研究の批判的検討は、朝鮮史研究会・旗田巍編『朝鮮史入門』(太平出版社,1966年)、朝鮮史研究会編『新朝鮮史入門』(1981年、龍溪書舎)に収められた旗田論文を参照のこと。なお日本における韓国史研究の現状については、朝鮮史研究会編『朝鮮史研究入門』(名古屋大学出版会,2011年)参照。

10 国際学術会議が日常化し、研究者相互の往来が頻繁になっている今日では全く信じがたいことであるが、私が学部生、大学院生の頃には、本国(南北)の研究者が日本を訪れることは、ほとんどなく(高松塚古墳発見の際に南北の代表的な学者が日本を訪れたのは希有な事例であった)、また日本の研究者が南北を訪問することも極めて珍しいこととされた。韓国に留学する日本人研究者が皆無であったというわけではないが、彼らは独裁政権に荷担しているかのように白眼視された。さらに80年代初頭まで、旅行すら許しがたい行為とみなされ、帰国後はつるし上げのような非難を浴びることがあった。一方、現今の国際学術会議の日常化のスピードは、改めて考えるべきことが少なくない。例えば、国際コリア学会は、2年に一度、世界の10カ国以上から朝鮮学研究者が一堂に会し、北朝鮮学界との交流を行っている。日本からの朝鮮史研究者の参加は殆ど無いようであるが、こうした状況は、日本の朝鮮史研究をゲッター化する恐れがある。AASに代表される学会を始め、今や世界中で開催される韓国学、朝鮮学の国際学術会議が日常化しており、一国内の問題意識に留まることなく様々な 이슈が研究対象となっている。朝鮮史研究も、国際的な歴史学の文脈で何が問題になっているのか、何を問題にすべきかを検討することによって、国際的学界の場で問題提起することが切実に求められているように思われてならない。

11 私が学んだ韓国において編纂された代表的な通史には、国史編纂委員会編『韓国史』(1973年-1978年)全25巻があり、北朝鮮で編纂された通史に、『朝鮮通史』(社会科学院,1970年-1980)全30巻がある。日本語で読めるものには、李基白(武田幸男監訳)『韓国史新論』(学生社,1979年)と孫永鍾他編『朝鮮通史 上』(外国文出版社、平壤、1992年)が最も身近にあった。現在、日本における最も詳細な通史には、李成市・宮嶋博史・糟谷憲一編『世界史大系 朝鮮史』(全2巻、山川出版社、2017年)がある。

12 北朝鮮のマルクス主義歴史学については、既存の民族史学を徹底的に批判しつつ、朝鮮の植民地支配からの独立を理論化した白南雲の1930年代の歴史学を出発点としていることに留意する必要がある。白南雲については、李成市『植民地朝鮮におけるマルクス主義史学—白南雲『朝鮮社会経済史』を中心に』(磯前順一・ハリイ・D・ハルトウニアン編『マルクス主義という経験』青木書店、2008年)を参照。また、韓国の立場から北朝鮮の歴史研究を分析したものに、都冕会ほか『北韓の歴史研究』(歴史問題研究所、ソウル、2000年)がある。

13 韓国人の立場から、日本における朝鮮史研究を多面的に批判した史学史には、李基白『民族と歴史—現代韓国史学の諸問題』が泊勝美氏の翻訳によって日本に紹介された(東出版、1974年)。この書に掲載

南北両国が克服の対象としている日本のかつての朝鮮史研究には、いくつかの特徴があるが、一つは停滞史観、もう一つは他律性史観である。前者の停滞史観は、19世紀末に、韓国が独力で近代国家を作り上げることができなかつたことを朝鮮の内在的な問題としてとりあげてきた¹⁴。後者の他律性史観は、地政学的に中国や日本などの外部の勢力(外圧)によって左右され、その歴史的な展開に自律性がないことが強調されてきた。

このような植民地支配を合理化する研究を批判することを主要な課題としながら、さらに二つの本国の研究と常に向き合わなければならないところに、日本で朝鮮史を学ぶ大きな意義の一つがあると私は考えている。

私がここで植民地主義にあえて言及するのは、朝鮮史が抱えている「植民地主義の克服(脱植民地主義)」¹⁵という問題は、韓国と北朝鮮という二つの「本国」が存在することにみられるように、この地域に戦前の植民地主義を未解決にさせた冷戦構造が依然として残っているという現実を喚起するためである。分断状況の克服は日本にも関わる重大な問題である上に、植民地主義の克服は人類史にとっても普遍的な課題であるがゆえに、朝鮮史研究は、世界史的な課題に取り組むことになりえ

るのではないかという点を強調したい¹⁶。

3. なぜ古代史研究なのか

以上のような朝鮮史研究の特殊性を踏まえた上で、なぜ私の研究対象が古代史なのかという点について述べたい。それを端的に物語るのは、朝鮮古代史研究がわれわれの想像以上に、朝鮮の植民地支配の合理化に動員されたという事実である。それゆえ解放後の南北の歴史学界は、戦前の日本人による朝鮮古代史研究の批判に多大な力を費やしてきたという経緯がある。

たとえば、韓国併合があった1910年に日本歴史地理学会が編修した『歴史地理 臨時増刊 朝鮮号』(1910年11月、三省堂書店)を見てみると、当時の日本を代表する学者たちのほとんどが執筆しており、この特集の目的は、古代以来の日本と朝鮮の関係史を説きながら、韓国併合を言祝ぐという編集になっている。実に、執筆者22人のうち、半数の11人が古代における日本の朝鮮支配に言及し、その年の韓国併合に結びつけるという論文を執筆している。要するに、古代史研究は、同時代の韓国併合という現実の政治に深く関わっており、韓国併合は古代への復古という国民的な通念を形成するイデオロギーとして大きな役割をはたしたのである¹⁷。

日本では学説史上、古代日本の朝鮮半島支配は、「任那日本府」という統治機関を通して4世紀半ばから562年に至る約200年間にわたってなされたと考えられてきた。ところが、1945年以後の南北の研究者による批判的研究、とりわけ韓国における

された李基白氏の旗田巍『朝鮮史』(岩波書店)批判によって、旗田氏は当時、毎年増刷されていた同書の絶版を決意させた。古代日朝関係と朝鮮王朝後期に対する叙述に、植民地史観を克服できていない箇所があるという批判であった。遅きに失した感があるが、植民地主義批判の立場から、戦後の朝鮮史研究を批判的に検証する時期に至っていると個人的に痛感している。たとえば、植民地朝鮮から引き揚げてきた研究者を中心に組織された朝鮮学会について、日本の学界において本格的な学問的分析がなされていないままにある。

14 戦後日本の朝鮮史研究をリードした旗田巍氏による優れた史論集に(『日本人の朝鮮観』勁草書房、1969年)と『朝鮮と日本人』(勁草書房、1983年)があるが、停滞論、他律性史観の批判については、各々取められた論文を参照のこと。

15 脱植民地主義(ポスト・コロニアリズム)とは、植民地体制が克服されず終わっていない状況をさす。このような問題意識から植民地時代とそれ以後の日本と韓国の状況を、博物館を事例にして論じた拙稿「朝鮮王朝の象徴空間と博物館」(宮嶋博史・林志弦・李成市・尹海東編『植民地近代の視座—朝鮮と日本』岩波書店、2004年)がある。

16 李成市「植民地文化政策の評価を通してみた歴史認識」(三谷博・金泰昌編『東アジア歴史 対話—国境と世代を越えて』東大出版会、2007年)。

17 李成市「韓国併合と古代日朝関係史」(『思想』1029、2010年1月)。

1970年代以降の開発に伴う考古学の発掘調査の成果と、日韓の文献学の研究成果によって、その論拠を失い、今日では日本の学界において古代日本の朝鮮半島支配説は全く否定されている¹⁸。

しかしながら、古代日本の朝鮮半島支配説は、韓国併合と重ね合わされて国民の通念となり近代日本人のアイデンティティの核を形成しているために、そのような学説は成立しえないという学界の共通認識は、いまだに日本国民の常識とはなっていない。それゆえ、朝鮮古代史と国民意識形成の問題は、日本人のみならず、韓国人・朝鮮人にとっても同様に大きな問題である。むしろ逆に、韓国、北朝鮮にとって、近代日本の古代史研究の批判から出発した金錫亨『古代朝日関係史』のように、支配のベクトルを韓国・朝鮮から日本へと転倒させた古代史が解放後の両国民のアイデンティティにとって重要な位置を占めていることも軽視できない深刻な問題である。史実とは無縁の荒唐無稽な朝鮮古代の史劇が大河ドラマとして韓国のテレビを賑わすのも、その現れの一つと私はみている¹⁹。

現在の韓国においても所謂「似而非^{サイビ}」史観なるものが市民から国会議員までを巻き込んで、誇大妄想的な古代史を学界に突きつけている。表面的には、国民の税金で運営されている東北アジア歴史財団が標的にされているようであるが、学界が有効な再批判を展開できていないところに現在の韓国学界の困難な現状が見て取れる。日本にも無

根拠な古代史を主張する国会議員や市民団体は存在する。しかし、戦前の津田左右吉事件や戦後の家永三郎教科書裁判、新しい歴史教科書問題のような近代歴史学が孕む本質的な問題への学問的な対応には至っていないように思われてならない。

翻ってみるに、20世紀初頭に清朝、ロシア、日本といった大国の狭間で、近代国家形成の途上で国家の独立が危殆に瀕したとき、申采浩を始めとする啓蒙史家たちが、古代朝鮮の歴史を説きながら民族意識の創出を企図した。かれらは、紀元前2333年に建国したという檀君神話を高調し、中国東北地方にまで展開した扶余、高句麗、渤海の歴史版図を朝鮮民族の故地として設定して、その広大な地域で展開した歴史を(近代的な意味での)朝鮮民族の誇りとして力説している²⁰。その後、植民地支配下でも、解放後においても、そうした歴史観は、様々な水脈を通して南北の歴史学界に継承され、植民地期の日帝との闘争が強調された分だけ、徹底した国民国家形成期の歴史学の批判は回避され、南北において中絶されてきたように見られる。

こうした背景もあって、古代の日朝関係史とは、古代の問題に止まらず、近現代の朝鮮人と日本人の

18 日本における最近の研究成果については、田中俊明『古代の日本と加耶』(山川出版社、2009年)が教育者や市民に向けて分かりやすく問題点を説いている。

19 たとえば、現在の北朝鮮、中国、ロシアにまたがる地域に歴史を展開した渤海史に関する理解をめぐっては、上記の国々に加え、韓国、日本の五カ国で各々異なる。そのような研究状況について、李成市「渤海史研究における国家と民族」(『朝鮮史研究会論文集』25、1988年)、同「渤海史をめぐる民族と国家—国民国家の境界をこえて」(『歴史学研究』626、1991年)を参照。こうした史学史上の問題点については、李成市「古代史にみる国民国家の物語」(『世界』611、1995年)で論じたことがある。

20 注19に掲げた私の渤海史をめぐる「南北国論」批判は、韓国の学界において、しばしば批判の対象となる。しかし冷静に考えてみるべきは、南北国論の端緒となった朴時亨の「渤海史研究のために」は、古代の国家の性格は支配集団の「血筋」で決まると主張している。後に述べるように、現在の東アジア諸国が共通して抱える問題の一つにレイシズムがある。とりわけ日本のレイシズムは深刻な状況にある。古代史研究者は今一度、近代国家において国民の血統や出自を問題にし、さらに民族のすべてが平等というわけではないと主張したのは一体、誰であるのか、その彼が何を指示し、何を行ったのかをよく考えてみるべきである。しかも、この東アジアにおいて国民の血統を最初に問題にしたのは帝国日本の臣民たちであり、かれらは台湾、韓国などを植民地にする過程で民族的優越感を形成し、帝国が崩壊した後も「帝国を支えていた集団的な空想」が簡単に変わることなく、「過去の植民地統治の階層秩序に固執」し、尊大な矜持から抜け出せない宗主国民の「殆ど滑稽」な姿に対して、酒井直樹(「ボックス・アメリカナの終焉とひきこもり国民主義」『思想』1095、2015年7月)は「ひきこもりの国民主義」と評している。古代史に血統を投影することの問題性を自覚すべきではないかと私は考える。この点について、津田左右吉に即した私見は以下の拙稿で述べた。「アジア認識—津田左右吉の事例を中心に」(歴史科学協議会編『歴史学が挑んだ課題』2017年、大月書店)。

アイデンティティが交錯する場でもあると言える²¹。東北アジアの広大な地域に展開したという朝鮮の古代国家形成史とともに、古代日朝関係史は、現在の韓国人・朝鮮人のアイデンティティに結びつけられて考えられているとみなさざるをえない。古代史研究が古代史にとどまらず、近代や現代にも大いに関わることの一端がこうした問題から見る事ができる。朝鮮古代史研究は、近代朝鮮思想史の問題でもあり、すぐれて近代日本思想史の問題であるといえる所以である²²。

4. なぜ「東アジア史」なのか

次に私が東アジア史研究に関心を抱いていることについて述べたい。興味深いことに、韓国では東アジア諸国に先んじて、高校の歴史教育では韓国史と世界史に加えて、2012年から東アジア史の授業を正規に開講している。しなしながら、1990年頃まで、韓国の歴史研究者の間では、「東アジア」という言葉を用いて歴史を語ること自体タブーに近いものがあった。韓国において「東アジア」という言葉は、1990年代になって初めて人文社会科学の分野で使われ始めたことが明らかにされている²³。

韓国において25年前まで「東アジア」という歴史がタブーであったかと言えば、それは極めて正当な歴史的な理由があった。すなわち、1930年代に日本は日中戦争の過程で、戦争を合理化するために「東亜」や「大東亜」という言葉を使いながら、戦略的に、近隣諸民族の融和策を研究者たちに構想させたという経緯があるためである。東アジア（「東亜」）は、明らかに1930年代から始まる日本の中国侵略と、それによって引き起こされた日中戦争を正当化するための近代日本の戦略的イデオロギーであった²⁴。

しかしながら、私が歴史研究を始めた頃、日本古代史や近代史研究の学会においては、もはや一国史的方法では研究は困難であるという問題意識が共有されはじめていた。特に西嶋定生氏は、東アジアという枠組みで歴史を研究する意義を1962年から1970年ころにかけて理論化していた。私が大学に入学する直前のことである。

私の見るところ、西嶋氏によって理論化された「東アジア世界論」は、約50年にわたって日本の学界のグランドセオリーとなっている²⁵。ここで言う「東アジア世界」とは、漢字文化圏とそれを形成させた中国の皇帝を中心とする政治圏が一体となって形づくられた自己完結的な世界（東アジア世界）を指している。そして漢字文化圏とは、漢字を媒介にして儒教、漢訳仏教、律令といった中国に起源する文化を受容した地域である。また政治圏とは、中国の皇帝を中心として形成された国際秩序が及

21 李成市「三韓征伐」(板垣竜太他編『東アジアの記憶の場』河出書房新社、2011年4月)。

22 近代歴史学の成立がどのような副作用をもたらすかは、端的に日本において1940年の津田左右吉事件をみれば明らかである。近代歴史学における「古代史の成立」とは、歴史学の論文よりは森嶋外の小説「かのように」(『中央公論』1912年1月)が最も参考になる。たとえば、嶋外は主人公(帝大國史学科を卒業してドイツ留学をした秀麿)に次のように語らせている。「まさかお父様だって、草昧の世に一国民の造った神話を、そのまま歴史だと信じてはいられまいが、うかと神話が歴史ではないと云うことを言明しては、人生の重大な物の一角が崩れ始めて、船底の穴から水の這入るように物質的思想が這入って来て、船を沈没させずにはおかないと思っていられるのではあるまいか」、「秀麿は父の誤解を打ち破ろうとして進むことを躊躇している。秀麿は父が為には、神話が歴史でないと云うことを言明しても、果物が堅実な核を蔵しているように、神話の包んでいる人生の重要な物は、保護して行かれると思っている」。

23 白永瑞氏の諸論文を参照。いまでも想起されるのは、サバティカル

で1998年に韓国に滞在中、講演を依頼されると「東アジア文化圏の形成」に関わる話しをしたが、その際に必ず「大東亜共栄圏」と「東アジア文化圏」との違いを明確にして論じるべきであり、軽々に「東アジア」を歴史の議論に持ち出すべきでないとの批判を受けたことである。その一方で、1998年は、韓国において「東アジア」や「東洋」を冠した季刊誌(『東アジア批評』『東アジア文化と思想』『今日の東洋思想』)が多く刊行された年でもある。

24 米谷匡史『思想のフロンティア アジア/日本』(岩波書店、2006年)。

25 李成市「東アジア世界論と日本史」(『岩波講座日本歴史』22、2016年2月)。

んだ地域である。中国の皇帝が漢代以降、周辺諸国・諸民族の首長に中国の爵位や官職を与えて形成された秩序構造は「冊封体制」とよばれている。このような地域には現在の中国、南北朝鮮、日本、ベトナムがあてはまる。

こうした近代以前の二千年にわたる歴史の枠組みとしての東アジア世界論の構想は、戦前の体制下で独善的に特異化された日本の自己中心的な歴史観(皇国史観)を克服し、あらためて世界史の文脈の中で日本史を理解しようとする試みであった。そのような明確な目的をもつ東アジア世界論の由来を求めてゆくと、それが1950年代に遡り、その時代の現実と深く関わっていたことが判明する。

すでに多くの拙稿で述べていることではあるが、簡単に紹介すると、1950年代に世界史教科書の執筆に従事していた上原専祿氏(1899-1975)は、世界史像の自主的な形成を国民的な課題として掲げていた。日本人の世界史における現代アジアへの問題意識が希薄であることを訴え、日本はアメリカの政治的従属下にあり、そのままでは戦後のアジア・アフリカ諸国と直接向き合うことができず、これでは真に世界史を生きる事ができないと上原氏には深刻に感じられていた。第一次世界大戦以後の世界秩序は、ヨーロッパ人によって支配の対象として作りあげたヨーロッパの秩序であり、これをアジア・アフリカ諸国と連帯して、その支配従属の構造を否定し、構造転換をはたすことが現代の切実な課題と受け止められていたのである²⁶。

このような視点から世界に向き合うとき、1950年代から60年代にかけての東アジアの現実、中国・朝鮮・ベトナム・日本の四つの地域が世界政治の問題構造の中で、密接に関わって存在していると見なされていた。すなわち四つの地域のいずれもが民族の独立という問題を抱えており、アメリ

カのベトナム戦争を媒介に、いずれも国家矛盾、民族矛盾の対立が減少する共通の場として地域世界を形成していると捉えられたのである。

こうした地域世界としての東アジアは、アメリカの帝国主義的支配に対して戦わざるをえない点で、問題の共通性、一体性をもつ地域なのである。このようにして共通項が捉えられたからこそ、ベトナムは東アジアの不可欠の一部であり、これらの地域の過去を追究すれば、二千年来の冊封体制によって形成された政治圏と文化圏が浮かび上がってくることになる。実は、こうした上原氏の構想に基づき、西嶋氏は東アジア世界論を構築したのである。それゆえ、1950年代から60年代にかけての日本人の現実認識なくして、東アジア世界論はありえなかったといえる²⁷。

したがって、1970年以降の日本の歴史学界で唱えられている東アジア世界論は、戦前の日本の政治イデオロギーとは一線を画した、日本の歴史家の現代的な課題から提起された考え方とみてよい。私は、現代的な問題意識のない歴史研究は無力だと思っているが、その意味で西嶋氏の歴史認識は、今なお現実を捉える枠組みとして優れており、その理論的な有効性も否定しがたいことを、一昨年刊行した『岩波講座日本歴史』第22巻所収の拙稿「東アジア世界論と日本史」の中で述べた。

今や「東アジア」問題は、日本のみならず、韓国の直面している切実な課題として、この20年近くにわたって韓国でも多様な議論が百出している。このような状況から、西嶋氏の「東アジア世界論」をみると、その問題点は鮮明になってきているのではあるまいか。

そもそも現在のヨーロッパ史あるいは世界史は、16世紀以降のヨーロッパ人の世界拡大にともなうヨーロッパ固有の歴史的課題に答えるためにヨーロッパの歴史的経験の深部から、彼ら自身の課題

26 李成市「東アジア世界論と日本史」(『岩波講座日本歴史』22、2016年2月)。

27 同左。

解決のために構想された歴史であった。そうであるならば、東アジア諸国が連帯して、自らの(東アジア諸国の)歴史的課題に応えるための世界史を新たに構想しなければならないということになると私は考えている。まさに、そのためにこそ、われわれは徹底的に現在の東アジア諸国が抱えている現実の課題から出発し、東アジアの切実な問題を解決するために、過去を問いながら、新たな東アジア史、新たな東アジア世界論が追究されなければならないはずである。

日本の「東アジア世界論」は、いわば日本という一人称から構想された歴史の枠組みであり、その弱点は、「東アジア」が一人称の問題でしかありえなかったことにあると思われてならない。事実、東アジア(「東亜」とは、歴史的にも論者の意図に拘わらず、日本の侵略を糊塗、隠蔽する為の言説として、日本人によって日本人のための言説として始まったことを想起すべきである。「われわれ東アジアで生きる人々が抱えている課題」というように、二人称で語りうる切実な課題が、歴史という過去に問いかけられてこそ、新たな東アジア世界論は、より豊かな枠組みになりうると私は考えている。

東アジア諸国は19世紀以降、欧米列強諸国との葛藤を経験し、また、東アジア諸国も相互に葛藤をくりかえす中で、ヨーロッパ人が生み出した近代に直面してきた。さらに東アジア諸国も、ヨーロッパ近代で生まれた近代性(modernity)を体験し、東アジア内部において侵略や植民地支配を押しつける過程で、苛烈な近代を生きることになった。こうした過程を経ながら東アジア諸国は、近代の国家形成を遂げてきたのである。

そのような東アジア諸国が現在、抱えている大きな問題の一つに、「植民地近代」が生み出した苛烈な近代が各々の社会を強く拘束しているという現実がある。東アジアの近代は、同一の文明圏の中で、植民地近代を強化しあう、いわば共犯関係

を形成してきたところに特徴があるようにみえる。そして脱植民地主義的(ポスト・コロニアル)な状況は、私には日本を含めて東アジア諸国に深く遍在していると思えてならない。それは、現今の中国や北朝鮮の政治行動が植民地近代を内在させていることをも含意している。

こうした文脈において、私にとって重要な課題は、東アジアにおける19世紀以降の近代国家の形成過程と、それによって現在直面している諸問題に帰着せざるをえない。とりわけ、東アジアにおける脱植民地的状況を直視し、互いに抱えている近代の難題を共通の克服すべき問題(大きくはこの地域の平和と人権、生命倫理、民主主義、レイズム(民族差別)、自然環境など)を捉え直し、そこから解放される道筋を追究するという思考方法が切実に求められているのではないだろうかと考えている。

また、何よりも東アジア史の観点から、私は古代東アジアにおける同時代の連関性の追求を行ってきたが、現代の矛盾の連鎖を想起すれば分かるように、それは国際関係や文化交流を重視するという単純なものでは終わらない。たとえば、630年から640年代には、唐、高句麗、百済、新羅、倭国で内乱(権力闘争)が起きており、ある人格に権力が集中されて中央集権的な国家体制ができることなどは、東アジアを視野に収めなければ理解できない問題であることを具体的な事実にして指摘してきた。

さらに、最近では、なぜ同時代に唐・新羅・倭国の3つの国で女帝が即位したのかという問題を、実証的に明らかにするというところに強い関心を持っている。東アジアの権力集中現象と同様に、一国史的方法では捉えきれず、女帝の問題も東アジアという視点から解明することは可能であると見ている²⁸。これに加えて、最近、9世紀から10

28 「東アジアにおける女帝の歴史」(『歴史地理教育』848号、2016年3月)。

世紀の文化史的動向も東アジア規模の変動として捉えられる点を、西嶋説を批判しながら論じたことがある(「東アジアという歴史観」鈴木靖民他編『日本古代交流史入門』勉誠出版、2017年)。東アジア史を深化させる可能性は増大するばかりである。

5. フィールドワークと 韓国出土木簡研究の可能性

ところで、話題を朝鮮古代史研究に戻すと、最初に述べたように朝鮮史は戦前以来の日本における研究と、南北の研究という三つの立場からの研究があり、それらは歴史的評価や解釈が大きく異なる。このような研究者のナショナリティ(国籍)によって色分けされ、交わることなく相反する仮説が対立する背景の一つには、朝鮮古代史関係の圧倒的な文献資料不足がある。朝鮮半島を中心に展開した諸国家を政治的に統合した新羅が滅亡したのは935年であるが、朝鮮古代史の基本となる編纂史料は、『三国史記』と『三国遺事』しかない。それゆえ10世紀までの歴史を研究する際には、同時代の中国の文献史料や、日本の文献史料を参照せざるをえない状況にある。現在まで確認されている10世紀以前の文書は数点に過ぎず、後に言及するように、石碑や金属に記された金石文や、木簡を含めた出土文字資料があるものの、木簡を事例にとっても現時点で約900点に過ぎない。中国や日本が30万という単位であるのに比すれば、その母数の違いは隔絶している²⁹。

私は80年代から恩師や研究仲間と30年以上にわたって毎年のように、韓国全土および、中国の遼寧省、吉林省、黒竜江省、北朝鮮の各地に残る古

代国家(高句麗、新羅、百濟、加耶)の山城や土城の踏査を行ってきた。そうしたフィールドワークは数少ない文献資料から古代史の諸事実を読みとる上で、きわめて大きな助けとなっている。私が韓国におけるフィールドワークを始めた1970年代末以降、おりしも韓国では、5、6世紀の石碑や木簡の発見が相次ぎ、これらの石碑や木簡は、従来の編纂史料では知りえない事実を次々に明らかにしてきた。とりわけ5世紀の中原高句麗碑(1978年)や、6世紀の新羅赤城碑(1979年)の発見は、朝鮮古代史研究を大いに活気づけた。これを契機に、この頃より大邱を中心とする古代史研究者が新羅の石碑の再検討をされたことも忘れられない。

その一方で、同じ頃に新羅の都があった慶州の宮苑池から約50点の木簡の出土が報告され、その後、百濟の都があった扶余や、さらに90年代に入ると、ソウル近郊河南市の二聖山城から地方に所在する新羅の山城からも木簡が発見された。これらの新羅木簡や百濟木簡は、すでにフィールドワークで踏査したことのある地域からの発見でもあり、それらの木簡に対して、私は大いに引きつけられた³⁰。

90年代に入り偶然にも、日本の或る雑誌の特集で韓国出土木簡の論文を書く機会に恵まれ³¹、それ以降、発掘現場と木簡の性格を追究しながら、韓国出土木簡の特徴やその占める位置の重要性について検討するようになった。特に私が注目したのは、従来、日本の学界では日本木簡と中国の簡牘(木簡や竹簡)との間には、ほとんど関連性は見いだせないと言われてきた事実である。実際に、木簡の形態も書式も全くと言っていいほど異なる。何よりも使用された時期の差は著しく大きく、中国で木簡が使用されるのは戦国・秦漢時代から4世紀頃までである。しかし、日本で使用され始めるのは

29 韓国木簡の概要については、李成市「東アジアの木簡文化—伝播の過程を読みとく」(木簡学会編『木簡から古代がみえる』岩波書店、2010年6月)参照。

30 長年の研究をまとめた拙著『古代東アジアの民族と国家』(岩波書店、1998年)は、その間のフィールドワークの恩恵なくしては考えがたい。

31 李成市「韓国の木簡」(『月刊しにか』91-5、1991年5月、大修館書店)。

7世紀の前半頃といわれている。それゆえ、日本古代史研究者は、日本木簡は日本列島で孤立して独自に形成され発展したものと固く信じてきた。

90年代の当時、韓国出土の木簡は100点程に過ぎなかったが、しかし数例ではあっても日本出土木簡と関連づけられそうな木簡が検出され、そのような点を具体的に指摘したことがある³²。私は日本の木簡学会において日本と韓国の両国で出土した木簡の類縁性に関する可能性を述べたが、前述のとおり、ある研究者から日本木簡と韓国木簡との間に関係など全くないと否定された³³。

その後、韓国において新たな木簡の出土が続くなかで、2000年にプロジェクト研究所として設立された早稲田大学朝鮮文化研究所は、2003年より韓国の国立文化財研究所および国立昌原文化財研究所との学術交流協定に基づく共同研究に着手し、韓国出土木簡に対する赤外線カメラによる調査に恵まれることになった。これによって、この数年のうちに、具体的に日韓における出土木簡の類似性を明確に指摘できる事例が一挙に多数検出されるようになった³⁴。

注目すべきは、以上のような韓国出土木簡や石簡などの出土文字資料の検討を通じて、古代における漢字文化の伝播と受容の過程が明らかになってきたという点である。従来、日本の学界では当然のこのように、古代日本の漢字文化は、直接、

渡来人(中国系人士)によって中国大陸からもたらされたと考えられてきた。しかし近年では、朝鮮半島の漢字文化を媒介にして漢字文化を受容した過程が5、6世紀の石碑や木簡によって学術的に裏づけられるようになってきたのである³⁵。

中国文明とりわけ漢字文化が周辺諸地域に伝播・受容されていく過程には、必ず媒介者を不可欠とするのであって、そのような媒介的な機能に注目する必要があると主張した³⁶。朝鮮半島と日本列島の間、そのような関係が認められるという事実には止まらず、さらに5、6世紀の石碑や木簡を見てみると、明らかに新羅の漢字文化は高句麗の漢字文化の影響を受けていることが容易に理解できる³⁷。

ところで、90年代始めに木簡が発見される以前から通い続けた咸安城山山城からは現在までに、約200点以上の木簡が出土している。それらの木簡は、当時の新羅領域内の城・村からもたらされた穀物などの物資につけられていた荷札であり、その書式や木簡の形態は、古代日本の木簡の原初形態ともいべき姿をしている。つまり、これまで中国木簡とは全くといってよいほど結びつかなかった日本木簡は、6世紀中頃と推定される咸安城山山城木簡の形態や書式において酷似しており、明らかに城山山城木簡は、7世紀後半以降の日本木簡の先行形態であることを認めざるをえない。また、その後、7世紀初頭の伏岩里百濟木簡の発見

32 李成市「韓国出土の木簡について」(1996年12月、木簡学会 第18回木簡学会研究集会)。

33 李成市「草創期韓国木簡研究の覚書」(『木簡と文字』4、2009年12月、ソウル)。

34 これまで刊行された韓国古代木簡の図録には、国立昌原文化財研究所『韓国の古代木簡』(国立昌原文化財研究所、2004年)、同『改訂版韓国の古代木簡』(国立昌原文化財研究所、2006年、昌原)、国立扶余博物館『百濟木簡—所蔵品調査資料集』(国立扶余博物館、2008年、扶余)、国立扶余博物館・国立加耶文化財研究所『木の中の暗号—木簡』(2009年、ソウル)を参照。なお、近年までの研究成果については、朝鮮文化研究所編『韓国出土木簡の世界』(2007年、雄山閣)および、工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』(アジア研究機構叢書人文学篇第一巻、2009年、雄山閣)を参照のこと。

35 李成市「韓国出土木簡と東アジア世界論—『論語』木簡を中心に」(角谷常子編『東アジア木簡学のために』汲古書院、2013年3月)。

36 同上。「媒介的な役割」は、これまで以上に注目してよい問題である。なぜなら、優れたメディア論研究に次のような指摘があるからである。「実際の歴史においては媒介者が、自分が媒介するものや、接続される伝達経路に勝り、それを塞いでしまうのだ。(中略)中間者こそが力をもつのである。媒介作用こそがメッセージの性質を決定づけ、関係が存在よりも優位に立つのである」(レジス・ドブレ(島崎正樹訳)『レジス・ドブレ著作集1—メディアオロジー宣言』NTT出版、1999年、8頁)という。

37 早稲田大学朝鮮文化研究所編『日韓共同研究資料集—咸安城山山城木簡』(アジア研究機構叢書人文学篇第3巻、朝鮮文化研究所・国立加耶文化財研究所編、2009年3月)。

によって、日本の古代木簡の源流が百済にあったことを国立奈良文化財研究所の研究者も認めることになった³⁸。日韓における出土木簡の比較をとおして、日本の漢字文化は新羅や百済を媒介に受容している可能性が明確になってきたのである。

また、最新の成果として、1990年代初頭に、平壤から『論語』竹簡が紀元前45年の楽浪郡25県の戸口統計簿と共に、貞柏洞364号墳から発見されていたことが最近になって判明した。発掘後約20年にして、きわめて重要な事実が明らかになったのであるが、今後の研究によって、中国大陸から朝鮮半島へ、どのような漢字文化が伝播し、それが朝鮮半島の諸国にどのように受容され、それがどのように変容して日本列島に伝播したのかという問題が解明される日も近いと思われる³⁹。朝鮮古代史は、木簡という出土文字資料を得ることによって、朝鮮史に止まらず、東アジア規模の歴史研究の重要な鍵を握る注目すべき研究分野になってきている。

最後に、次のような成果について言及しておきたい。従来、古代日本の中国文明化は、600年の遣隋使にはじまり、続く630年からの遣唐使と併せて、約100年にわたる中国との交流によって、701年の大宝律令、つまりは中国的な法律体系に基づく国家制度を完成させたというように考えられてきた。これは日本学界の常識中の常識であった。

ところが韓国において新羅や百済の木簡が出土することによって、700年以前の古代日本の諸制度は隋や唐の制度ではなく、百済・新羅が受容した中国の諸制度を間接的に受容してきたことが木簡によって裏付けられるようになってきた。

つまりは、701年の大宝律令は、それ以前とは格段とレベルの異なる中国的な、唐の制度を一気に

理念として直輸入したという事実が強調されるようになってきたのである。遣隋使以来、中国から直接に学んだのではなく、隣国の朝鮮半島の諸国の制度を通して中国の諸制度を学びながら、それを前提に、701年に至って目指すべき理想としての中国的な法制度を整えたのが大宝律令であるという事実が裏づけられつつある。こうした理解は、韓国木簡の発見と、宋代の天聖令の発見と研究によって進展してきた研究成果である⁴⁰。韓国木簡研究の成果は、東アジア規模の歴史像の変更を迫っているのである。

おわりに

以上、「朝鮮古代史研究から東アジア史への展望」という主題のもとに、私の研究の歩みを述べてきた。東アジア史に関わって最後に述べたいことは、2001年以来、10年以上にわたって私が積極的に携わってきた東アジア諸国における歴史研究者間の歴史対話である。とりわけ2001年から開始した民間レベルの日韓歴史認識対話である「批判と連帯のために東アジア歴史フォーラム」は忘れがたい経験であった。そこでの問題意識は、東アジア諸国のナショナリズムが抑圧的で保守的な勢力に利用されやすく(フォーラムでのキーワードは「敵対的共犯関係」であった)、両国間の学横断的な連帯が困難であり、諸国家が難局に直面すると、歴史(ナショナリズムの神話)を持ちだし国民の意識を煽るために「歴史認識問題」が繰り返される状況をどのように断ち切るのか、そのような際に、国家が提供する国民の眼を惑わす組織的な妄言を如何

38 李成市「羅州伏岩里百済木簡の基礎的研究」(鈴木靖民編『日本古代の王権と東アジア』吉川弘文館、2012年3月)。

39 李成市「平壤楽浪地区出土『論語』竹簡の歴史的 성격」(『国立歴史民俗博物館報告』194、2015年3月)。

40 李成市「日韓古代木簡から東アジア史に吹く風」(『史学雑誌』124-7、2015年7月)。なお、この点を大隅清陽氏は、次のように表現している。「古代日本は一直線に7世紀初頭の遣隋使から8世紀初頭の大宝律令へと古代日本の中国的律令の受容過程(唐風化)を信じていた従来の認識体系を捨て去らなければならない」(大隅清陽「これからの律令制研究—その課題と展望」(『九州史学』154、2010年2月)。

に脱構築(解体)するのかということであった。東アジア諸国間の連帯を阻む国史の構造の解明と解体に関わる日本と韓国の歴史対話の成果は、韓国で2冊、日本で2冊の著作として出版してきた⁴¹。

また、2013年から2015年まで、3年間にわたって日本、韓国、中国の若手研究者の歴史家育成セミナーを主催してきた。学位を取得したばかりの三国の若手歴史研究者が今後、自分の歴史研究を深化させていくとき、自国の研究者だけでなく、いつも隣国の歴史研究者を意識しながら、新たな歴史を構想して欲しいという願いから、東京大学の三谷博氏と発案した。復旦大学の張翔氏、ソウル大学の朴薫氏など両校の先生方と共に、早稲田大学と3校で、3年間にわたってセミナーを実施し、実に多くの若い研究者が対話に参加した。

私が従事してきた朝鮮古代史研究は、本人(研究主体)が意図するとしないうちに問わず、国際的な聴衆の批判にさらされない、偏狭なナショナリズムに陥りかねない危険性を帯びている。この点は、朴露子(ウラジミール・チーフノフ)氏が『逆さまにみる韓国史』(ハンギョレ、2010年)で指摘したとおりである。ナショナリズムだけでなく、新自由主義とグローバル化は、私たちの視野を狭め、問題を単純化する傾向がある⁴²。つねに開かれた視野から従前の歴史研究を更新していくことを残された研究生活において少しでも多く実践していきたいと願っている。

41 『国史の神話を超えて』(林志弦との共編、2004年3月、ソウル、ヒューマニスト社)、『植民地近代の視座—朝鮮と日本』(宮嶋博史、林志弦、尹海東との共編、岩波書店、2004年10月)、『東アジアの記憶の場』板垣竜太・鄭芝詠他編、河出書房新社、2011年4月)。

42 『ヤガシラ腕の外へ』(ベネディクト・アンダーソン、加藤剛訳、NTT出版、2009年7月)

* 本稿は、2017年夏の第2回韓国前近代史若手研究者セミナーにて講演用に配布されたものに筆者本人が加筆訂正を行ったものである。